

JSR株式会社

2019年3月期第2四半期 決算補足説明電話会議 議事録

(2018年10月29日開催)

決算補足資料:

http://www.jsr.co.jp/pdf/ir/h31_2019/h31_3_h_d24h.pdf

P2 決算ハイライト1

- ・当期実績と通期見込みの対比。
- ・当年度より開示セグメントを変更し、セグメント毎に売上収益、営業利益を表示。
- ・合成樹脂事業は、UMG社と統合した数値を当期の決算に反映。
- ・2018年度上期は見込みに対して上回った。
- ・顧客業界は総じて堅調に推移した。為替は当初想定 105 円に対し 110 円の 5 円円安。原料価格はブタジエンが 1579 \$ と当初予想の 1300\$ に対し上昇。その他のエラストマー、合成樹脂の主要原料（スチレン、アクリロニトリル、エチレン、プロピレン等）も上昇。併せブタジエンとその原料であるナフサ(MOPJ)とのスプレッドも拡大した。
- ・当年度上期の営業利益の対計画進捗率は、年度に対し約 47%。対上期では約 100%超。
- ・為替は 1 円円安で理論上年間 6 - 7 億円の営業利益増となり、半期では、5 円の円安で 17 億円程度、営業利益の押し上げ要因となった。一方原料価格の上昇は、当社のエラストマー、合成樹脂の利益（売買スプレッド）の一時的な縮小要因になった。これは原料価格の上昇に対し製品価格の改定が通常 3 ヶ月～6 ヶ月のずれが生じるため。
- ・下期に向けては、各事業の利益成長を織り込む。エラストマーは製品価格改定による売買スプレッドの改善を見込む。又 SSBR の拡販を進める。合成樹脂も製品価格改定による利益改善を見込む。デジタルソリューションは上期に引き続き先端材料の拡大を図る。売上収益、利益とも大きく伸長したライフサイエンスは成長を継続する。
- ・足元、ブタジエン市況の大幅下落や、中国などでの自動車タイヤ需要の減退懸念等世界経済に不確定要因があり、それらに対し細心の注意を払い事業運営を行っていく。
- ・尚、通期見通しは、今回変更を行っていない。

P3 決算ハイライト2

- ・各事業の対前年同期（HoH）、対前期（QoQ）の比較。
- ・前年同期比、前期比とも増収減益となった。
- ・対前年同期は、エラストマーの大幅減益が影響（後述）。前年度は一過性利益の計上あり。

他の事業は増収増益。特にライフサイエンスの増収増益幅が大きく第3の柱としての進捗が見られた。その他・調整額は主に次世代研究費(JKiC)の増加。

・QoQ対前期では、エラストマー、合成樹脂は、売上収益はほぼステイも減益。売買スプレッドの縮小。原料価格の上昇が続き製品価格への反映が一部次期に繰り越された。デジタルソリューション、ライフサイエンスはQoQで増収。デジタルソリューションは増益。ライフサイエンスは先行投資費用が発生しQoQで減益。販売自体は力強く伸長している。

P4 セグメント損益 エラストマー事業

・セグメント別損益のエラストマー事業。

環境

・主要需要業界は、国内タイヤ生産は対前年+4~5%と堅調に推移。
・合成ゴム市況は、主要原料であるブタジエンが当期1579ドル/トンと、当初想定より上昇。ナフサ価格(MOPJ)とのスプレッドも拡大。その他の主要原料も軒並み上昇した。
・一方1700\$を超えていたブタジエン市況が8月後半から9月に入り1000~1100近辺へ下落。合成ゴム需要に対し短期的には不安定要因になっている。

YoY

・販売数量は微減。売上収益は拡大。SSBRは数量拡大。
・営業利益は対前年55%と大幅に減少。
・価格差が-14億円。前年度は、2016年度4Qにブタジエン価格が2600\$まで急高騰しスプレッドが2100ドルまで拡大。そのスプレッドが翌17年度1Qのプライシングに反映され利益が大きく増加した。当社の価格フォーミュラによるもの。又当期も原料価格高とスプレッド拡大が進行した。それに伴う製品価格改定は進めたものの、一部は翌期での反映となり、当期はコスト増となった。その他、は前年度上期は、会計上のその他の営業収益(特別利益的なもの)が発生し利益を底上げしていた。又在庫増減で発生する受払差が前年度の方がより利益方向に作用した。

QoQ

・売上はほぼフラット、利益は減益となった。
・販売数量は対前期若干減少。輸出で落ちる。1Qの好調出荷の反動や中国での夏季期間の稼働調整あり。又ブタジエン価格の乱高下で一部需要を控える動きもあったとみている。
・営業利益はQoQで-2億円。数量減の影響に加え価格要因がマイナス。2Q平均では一時ブタジエンは1700\$を超えた。他の原料も上昇を継続。表には代表的な主原料であるブタジエン価格表記しているが、その他スチレン、エチレン、アクリロニトリル等の原料も軒並み価格が上昇した。顧客とのフォーミュラに基づき製品価格改定を行っているが、反映のタ

イムラグがあり当期単独ではスプレッドが縮小した。10月には価格値上げをプレスリリースもしており、3Q改善する見通し。

P5 セグメント損益 合成樹脂事業

・セグメント別損益 合成樹脂事業。

(環境)

- ・ABS樹脂の需要環境は自動車業界向け等堅調。
- ・原料市況は、主要原料であるスチレン、ブタジエン、アクリロニトリルとも上昇継続。

YoY

(差異分析では旧UMGの利益差異は、その他、に一括して計上している。従い、数量差、価格差は旧テクノポリマーの数値)

・堅調な需要と拡販努力により売上収益は拡大した。営業利益は、数量増効果があるものの、価格差によりマイナス。全体では旧UMGの加算により増益となった。又前年同期の営業利益率は12%を超え収益環境としては良すぎた面もあり、そこは当初から割り引いて計画している。又、原料価格の上昇に対し当期も製品価格転嫁を行ったが、通常フォーミュラ、個別交渉も含めて3ヶ月~6ヶ月価格転嫁に時間を要する。上期も継続して原料価格が上昇したため、その分は3Q以降に増益方向で反映される。

QoQ

(差異分析は旧UMG含めて、数量、価格、その他で記載している)

・数量は落ちたものの出荷の山谷の影響のレベル。需要自体は堅調であった。原料価格の上昇に対し当期も製品価格の転嫁をおこなった。一方2Qも原料価格の上昇が続き、この分の製品価格への転嫁は3Q以降になる。これにより当期は価格差マイナスとなった。

P6 セグメント別損益 デジタルソリューション事業

・セグメント別 デジタルソリューション事業。

(環境)

- ・主要需要業界は、半導体、ディスプレイとも総じて堅調に推移。
- ・半導体業界は、9月時点のシリコンウエハー出荷面積見通しはYoY +5.4%。当社の顧客業界の稼動も堅調。
- ・ディスプレイ業界は、9月時点のパネル出荷面積見通しはYoY+5%。当社の顧客業界の稼動も堅調。

YoY

- ・売上収益は半導体材料が対前年 108%と好調を継続。主要顧客の稼働が好調の中、先端ライオン向け ArF レジスト等が順調に販売を伸ばした。
- ・ディスプレイ材料は、配向膜、絶縁膜など主要事業は中国向けなどに数量を拡大したが、着色レジストの販売減によりディスプレイ材料全体では売上高は減少した。
- ・エッジコンピューティング材料は、需要業界の生産調整を受け売上高は減少した。
- ・営業利益は、価格下落の影響や半導体材料で固定費の増加はあったが、半導体材料の数量増により増益となった。

QoQ

- ・売上収益は、全事業が増加した。半導体材料、ディスプレイ材料とも好調な 1 Q を継続した形。エッジコンピューティング材料も 2Q は回復。
- ・営業利益は若干増益。

P7 セグメント別損益 ライフサイエンス事業

- ・セグメント別 ライフサイエンス事業
- ・当事業はエラストマー、デジタルソリューションに続く当社の第 3 の柱と位置付け、当期よりセグメントを独立した。
- ・当分野では自社材料の展開に加え、MBL、KBI、SELEXIS、Crown 等関連する企業に出資し、戦略的な基盤を整えた。今年度 5 月末に買収が完了した Crown は 6 月以降当決算に反映されている。
- ・顧客市場であるバイオ医薬品市場は年率 10%前後で成長している。当社はユニークな製品・サービスで市場成長を大きく上回る成長を遂げている。

YoY

- ・売上高は対前年 172%と大きく拡大。KBI の CDMO 事業が順調に拡大した他、自社材料のバイオプロセス材料 (Amsphere A3) や診断薬・中間体の販売も好調。昨年度 2Q から連結の SELEXIS、当年 6 月から連結の Crown も寄与。
- ・営業利益は大幅に改善し今期は黒字。昨年は KBI や AmsphereA3 の増投資等先行費用が嵩んだが、売上成長で大幅な増益となった。

QoQ

- ・売上高は QoQ 15%増と好調を継続。Crown が 6 月から連結された。KBI の CDMO 事業は分析、製造プロセス、生産委託各事業共顧客とのコントラクトが順調に拡大した。SELEXIS とのシナジーも発現している。利益は KBI、Crown の先行費用で QoQ では減少。下期には確実に増益に貢献する見通し。

P8 連結損益計算書

- ・2018年の第2四半期は、対前年+21%の増収でした。各事業売上の売上増と合成樹脂の統合効果。
- ・売上総利益は+13%の増加。
- ・販売費・一般管理費は対前年+85億円。新規連結(Crown、UMGなど)で半分程度、その他運送費、人件費、試験研究費等が増加した。
- ・その他の営業収益では、昨年度10億円の一過性の利益の計上あり。
- ・営業利益は、224億円となりました。対前年-10億円。
- ・金融収支は利益側に11億円。為替差益の影響。
- ・法人所得税を引いた当期利益は173億円、非支配持分の利益を引いた、親会社株主の当期利益は167億円。

P9 連結財政状態計算書

- ・資産合計は、6,998億円となり、前期末から+521億円増加。
- ・流動資産は、前期末から129億円の減少。UMGの統合により営業債権、棚卸資産が増加したが、Crownの買収、7月に実施した自社株買い等により現金が減少した。
- ・非流動資産は、前期末から+650億円増加。有形固定資産は、UMGの統合と設備投資により増加。のれんはCrownの買収により増加。
 - ・負債は、2,629億円となり、前期末から+268億円増加した。
 - ・流動負債は、+303億円増加。UMG統合による増加が主なもの。
 - ・資本は4,369億円で、+253億円の増加。利益剰余金の増加とUMGの統合で非支配者持分が増加。7月より50億円の自社株買いを行った。

P10 Appendix 四半期推移

- ・過去1年間の各セグメントの売上収益・利益推移を掲載。

P11 Appendix 通期予想

- ・当年度通期での計画は当初数値から見直しは行っておらず、変更はなし。
- ・減価償却費、資本的支出、研究開発の実績を記載している。

(足元の各事業の需要環境)

エラストマー

足元のブタジエン価格の急激な下落は事業環境への影響を注視していく。背景の一つに中国での需要減少があると推測。米中貿易摩擦で、中国経済全般で先行き不透明感があると理解。

一方、国内タイヤ生産は堅調。通常下期は合成ゴムの需要期。当社の売上の約70%はフォーミュラユーザーであり、SSBRも拡販が期待できることから、下期に向け安定した販売を見込む。2Qまでの原料価格上昇に対する製品価格の改定は増益に寄与する。

合成樹脂

当社が属す特殊ABS樹脂市場は自動車向けに堅調。当社は国内、輸出とも販売を伸ばしている。昨年度より一貫して原料価格が上昇しており、上期に原料価格上昇分を10月以降の製品価格改定に反映させる。UMGとの統合は順調。今年度はシステムや組織統合などの活動を推進している。シナジーは来年度以降発現していくと期待。

デジタルソリューション

半導体は上期YoY+8%と市場を上回って成長。当社は最先端ラインでシェアを拡大しており、当面市場を上回る高成長が持続すると見ている。顧客業界の稼働は堅調。市場の期待が先行し市況が変動している側面があるが、実需面は安定的に成長すると見ている。

ディスプレイ材料は、2Qにかけてパネル価格は下落後、直近上昇するなど変動しているが、顧客のパネル工場の稼働は高稼働を継続。パネルの面積需要も+5%程度と見ている。当社の主力製品の中国シェアは伸ばしており下期も安定的に推移すると見ている。

ライフサイエンス

上期は、当初見込み以上の売上収益増を達成した。確実に幅広く顧客需要を取り込んでいく。KBIのPhase3案件で一件、9月にEC承認を受けた。11月には米国承認も見込む。上期時点で通期売上計画のほぼ半分を達成しており、下期も好調な販売は継続するだろう。利益も来年度に向けて増益幅が拡大していく計画。

為替は先行き見込み辛いですが、円安が続く場合には当社の利益にはプラスとなる。

以上